

サブノートで
分かる!

詩・和歌・俳句 / 近代文学史



(永田 麗 栄光ゼミナール 大学受験ナビオ / 国語科講師)

◆ I



1. 口語
2. 定型
3. 情
4. 直喩
5. 隠喩
6. 擬人
7. 体言止め
8. 頭韻
9. 脚韻
10. 倒置
11. 対句
12. 短歌
13. 長歌
14. 枕詞
15. あしひきの
16. たちねの
17. ひさかたの
18. 序詞

I : 詩・和歌・俳句

《頻出》

● A : 詩

(1) 詩の分類

→ 文体から文語詩・(1) 詩に、形式から (2) 詩・自由詩・散文詩に、内容から叙(抒)(3) 詩・叙景詩・叙事詩に分類される。

(2) 詩にみられる表現技法

→ ①「ようだ」「ごとし」を用いて直接たとえる (4) (明喩)
 ②「ようだ」「ごとし」を用いず、暗示的に示す (5) (暗喩)、
 ③人間でないものを人間にたとえる (6) 法(活喩)などを、
 総じて「比喩法」という。

→ 文末を体言(名詞)で止め、余韻を与える技法を (7) という。

→ 行の初め (8) や終わり (9) を同じ音にして響きやリズム感をもたせる技法を「押韻法」という。

→ 語の順序を変えることで印象を強める技法を (10) 法という。

→ 同じ語句を繰り返してリズム感を出す技法を「反復法」という。

→ 似た言い回しを用いながら語句を対照的に並べて比べることで、リズム感を出す技法を (11) 法という。

● B : 和歌

(1) 和歌の主な形式

→ ① (12) (五・七・五・七・七), ② (13) (五・七・五・七……五・七・七), ③旋頭歌(五・七・七・五・七・七)など。

(2) 和歌の表現技法

→ ある特定の言葉を引き出すために置かれる、主に五音の語を(14) という。初句か三句に使われる。

(例) (15) → 山・峰・尾上(おのへ)・岩根

(16) → 母・親

(17) → 光・天(あま)・雨・空・雲・都

→ 任意の言葉を引き出すために置かれる、主に六音以上の語を(18) という。自然描写が多く、後に続く下の句の内容は恋の心情であることが多い。

(例)

あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む
(序詞)—————↑

→ 1語に2つ以上の意味をもたせる技法を(19) という。

(例)

秋の野に 人まつ虫の 声すなり 我かと行きて いざとぶらはむ
→ (20))と(21))の掛詞

→ 歌の中心となる語に意味上で関連する語句を詠み込む技法を(22) という。

(例)

青柳の 糸よりかくる 春しもぞ 乱れて花の ほころびにける
→ (23))の縁で「よ(縊)り」「乱れ」「ほころび」を詠み込む。

(3)おもな歌集

① (24))

→ 奈良時代(759年以降?)に成立。撰者は大伴家持か。約4500首を収める現存する日本最古の和歌集。

② (25))

→ 平安時代(905年)に成立。撰者は紀貫之ら。醍醐天皇の勅命による日本最初の(26))である。約1100首を収める。いわゆる(27))(大伴黒主・喜撰法師・小野小町・僧正遍昭・文屋康秀・在原業平)が活躍した。

③ (28))

→ 鎌倉時代(1205年)に成立。撰者は藤原定家ら。後鳥羽上皇の院宣による勅撰和歌集であり、(29))の最後。約1980首を収める。

● C : 俳句

(1)俳句の形式ときまり

→ 原則として季語を1つ詠み込むことを(30) という。㊟無季・無定型の俳句を「自由律俳句」という。

→ 五・七・五の三句十七音を(31))とする。俳諧における連歌の発句が独立したもの。

→ 「や」「かな」「けり」「ぞ」などを用い、意味の切れ目や感動の中心を表す技法を(32) という。

(例)

菊の香や 奈良には古き 仏たち
→ 「や」は「菊の香」=感動の中心を示す(32))である。

(2)おもな俳人

① (33))

→ 江戸前期の俳人。俳諧を芸術として確立。『おくのほそみち』(ジャンルは「紀行文」)『俳諧七部集』『笈の小文』(おいのこぶみ)など。

- 19. 掛詞
- 20. 松
- 21. 待つ
- 22. 縁語
- 23. 糸
- 24. 万葉集
- 25. 古今和歌集
- 26. 勅撰和歌集
- 27. 六歌仙
- 28. 新古今和歌集
- 29. 八代集
- 30. 有季
- 31. 定型
- 32. 切れ字
- 33. 松尾芭蕉

教職教養
一般教養

- 34. 与謝蕪村
- 35. 小林一茶
- 36. 正岡子規

◆Ⅱ



- 1. 写実
- 2. 坪内逍遙
- 3. 没理想論争
- 4. 二葉亭四迷
- 5. 紅露
- 6. 尾崎紅葉
- 7. 幸田露伴
- 8. 樋口一葉
- 9. 浪漫
- 10. 森鷗外
- 11. 島崎藤村
- 12. 与謝野晶子
- 13. 自然
- 14. 永井荷風
- 15. 島崎藤村
- 16. 田山花袋
- 17. 余裕
- 18. 森鷗外

- ② (34))
 ▶江戸中(天明)期の俳人・画家。「蕉風」復興を主張しつつ、作風は客観的・絵画的と評される。『夜半楽』『新花摘』など。
- ③ (35))
 ▶江戸後期の俳人。作風は主観的・個性的であるといわれる。『おらが春』『父の終焉日記』『我春集』など。
- ④ (36))
 ▶明治期の俳人。近代俳句の祖。雑誌「ホトトギス」で写生俳句を志向した。夏目漱石と東大予備門で同窓。弟子に高浜虚子、河東碧梧桐ら。『歌よみに与ふる書』(歌論書)『寒山落木』(句集)『病牀六尺』(随筆)など。

Ⅱ：近代日本文学のおもな思潮 《頻出》

(1)明治期の文学思潮

- (1)) 主義 (明治20年前後)
 ▶19世紀に西欧で起こり、日本ではシェイクスピアの影響を受けた (2)) が『小説神髓』(1885)で小説における写実的描写を提唱し、森鷗外との間で (3)) を展開した。言文一致を志向する (4)) の『浮雲』(1887)に影響を与える。
- 擬古典主義 (明治20年代)
 ▶急速な欧米化に反発し、井原西鶴を模した擬古典文体を用いた、いわゆる (5)) 時代。硯友社を率いた (6)) の『金色夜叉』(1897)、硯友社に対し理想的な古典世界を目指した (7)) の『五重塔』(1891)、(8)) の『たけくらべ』(1895)、『にぎりえ』(1895)など。
- (9)) 主義 (明治20年代後半～30年代)
 ▶前近代的な封建社会から自己を解放し、思想や感情の自由を目指す。日本では (10)) の『舞姫』、泉鏡花の『高野聖』(1900)、(11)) の詩集『若菜集』(1897)、(12)) の『みだれ髪』(1901)などに見られる。
- (13)) 主義 (明治40年代)
 ▶もとは19世紀末にフランスに起こった、小説に科学的・実証主義的な手法の導入を提唱する「ゾライズム」。小杉天外や『ふらんす物語』の作者 (14)) らによって紹介された。日本では「あるがままに描く」ことを志向するあまり、現実を醜く悲観的に捉える「暗い文学」になりがちで、小説に転じた (15)) の『破戒』(1906)、(16)) の『蒲団』(1907)がその代表。
- 鷗外・漱石の文学 (明治30年代後半～)
 ▶自然主義の平板な現実模写に反発し、知性と倫理に裏付けられた彼らの初期の文学的態度を (17)) 派と呼ぶ。(18)) は『阿部一族』(1913)『山椒大夫』(1915)『高瀬舟』(1916)『雁』(1911)

『渋江抽斎』(1916)など、(19)は『吾輩は猫である』(1905)『坊っちゃん』(1906)『草枕』(1906)のほか、前期(20)の『三四郎』(1908)『それから』(1909)『門』(1910)、後期(21)の『彼岸過迄』(1912)『行人』(1912)『ころも』(1914)、絶筆となった『明暗』(1916)など。

(2)大正期の文学思潮

○反自然主義(明治40年代～)

➔自然主義の行き過ぎを批判。美の追究を第一とし、官能的で退廃的な傾向が強い(22)派の(23)は『あめりか物語』(1908)や『ふらんす物語』(1909)、(24)は『刺青』(1910)『細雪』(1943)を著す。学習院に集った(25)派は人道主義を掲げ、雑誌「白樺」を中心に大正期の思想や芸術の中心をなした。同派の精神的支柱である(26)は『友情』(1919)を、小説の神様こと(27)は『城の崎にて』(1917)、有島武郎は『カインの末裔』(1917)『或る女』(1919)などを著す。新思潮派の(28)は同人誌『新思潮』を中心に現実を主観的に解釈し、技巧的に現実を創出することを主張。『羅生門』(1915)『鼻』(1916)など。(29)は『恩讐の彼方に』(1919)が代表作品。

(3)その後の文学思潮(大正末～)

➔大正中～昭和初期には第一次世界大戦後の労働者と資本家の対立の激化を背景として興った社会主義思想に基づくプロレタリア文学で(30)は『蟹工船』(1929)を著す。他方、大正末～昭和十年代にかけて新感覚派は反プロレタリア文学の立場から文学に対する政治の優位を拒み、従来の平板なリアリズムを排して現実を鋭い感覚で捉え、知的操作によって再構成しようとした。代表作は(31)の『旅愁』(1946)、(32)の『雪国』(1937)など。なお、後者は同作品で日本人初の(33)を受賞。そして第二次世界大戦後、社会を覆う虚脱感の中で、(34)は反俗無頼の心情を基調とした作品を発表。(35)の『墮落論』(1947)、(36)の『斜陽』(1947)『人間失格』(1948)など。

- 19. 夏目漱石
- 20. 三部作
- 21. 三部作
- 22. 耽美
- 23. 永井荷風
- 24. 谷崎潤一郎
- 25. 白樺
- 26. 武者小路実篤
- 27. 志賀直哉
- 28. 芥川龍之介
- 29. 菊池寛
- 30. 小林多喜二
- 31. 横光利一
- 32. 川端康成
- 33. ノーベル文学賞
- 34. 無頼派
- 35. 坂口安吾
- 36. 太宰治

教職教養

一般教養

Ⅲ：その他の出題について

《頻出》

○古典(古文・漢文)

➔(対策)ごく基本的なレベル。薄手の問題集を用意し、古文…解釈・文語文法・文学史など/漢文…再読文字・句形・漢詩の形式・文学史などをチェックするとよい。

◆Ⅲ